

# ヘレニズム～イスラーム考古学研究会 2000～2001年度報告

岡田保良・佐々木達夫

A Report on the Annual Study Meetings of the "Japanese Society for Hellenistic-Islamic Archaeological Studies",  
2000-2001  
Yasuyoshi OKADA, Tatsuo SASAKI

本会は、規約や会費など特に定めはないが、西アジアの比較的新しい時代の考古学、歴史学、美術史、建築史などの諸分野の研究者が、自由闊達な雰囲気の中で自らの活動を仲間たちに、あるいは広く学界に問う機会として設けたものである。金沢大学文学部を会場として1994年に始まり、以後毎年6月末ないしは7月初頭の週末を定例の開催日としている。本誌第1号に第6回までの概要を記したことがある。本稿は、今後一層の会の活性化を期し、2000年の第7回、2001年の第8回の研究発表概要を報告するものである。なお第7回研究会より、会の開催に先立って予稿集の製作刊行を試みている。本稿は、その予稿集のほか会場での質疑討論をも含めた筆者らの独善的非公式ノートと記憶に基づいている。以下の報告内容に必ずしも発表者の意に沿わぬ点があるとすればその故であり、筆者の責であることを断っておきたい。

まず、第7回及び第8回研究会の発表者と各演題は、発表順に以下の通りだった。なお、研究会の事前案内に掲載したプログラムとは発表順や演題の一部に変更があった。また、以下日本人の敬称は略させていただいた。

## ◇ 第7回研究会 (2000年7月1日-2日)

- 津村真輝子「イスラーム初期のサーサーン式コイン —新疆ウチャ出土の一括コインを例として—」  
宮下佐江子「パルミラ出土の有翼女性像の起源について」  
山内 和也「イラン南部の考古学的調査」  
深見奈緒子「イスラーム建築史におけるイーヴァーンとターラー」  
伊藤 重剛「ギリシアの古代都市メッセネの墓廟建築に関する研究」  
岡田 保良「ハギア・サマリーナ —中期ビザンチン時代メッセニアの小教会—」  
木下 亘「ダルベルジン・テパ出土の陶棺について」  
土谷 遙子「パキスタン北部地方ダレルの現地調査」  
前田 龍彦「パーミヤーンの太陽神について —光背を中心に—」  
小谷 伸男「アイ・ハヌムの滅亡 —中国史料からの考察—」  
Paul Bernard「AiKhanum (Afghanistan): a Greek Colony in Central Asia」

- 辻 成史「ゲミレル島 (小アジア リキア地方 地中海沿岸) 第二聖堂「クリュプタ」壁面のグラフィティ」  
長谷川 奏「古代末期のメンフィス地域 —ナイルと運河のネットワーク—」  
西本 真一「古代エジプト・クルナの石切り場」  
春田 晴郎「イーゼ平原のエリュマイス王国期浮彫」  
佐々木花江・佐々木達夫「アラビア半島シャルジャ首長国ルリーヤ砦第1次発掘調査」

## ◇ 第8回研究会 (2001年6月30日-7月1日)

- 高浜 秀「ユーラシア草原地帯の帯飾板の一種について」  
田辺 勝美「ガンダーラの“胡床”(sella curulis)について」  
春田 晴郎「パルティア・ニサ文書とカーハク (アビーヴァルド)」  
辻村 純代「南レバノンにおけるローマ時代の墓制」  
飯島 章仁「ポンペイ第四様式のフリーズ・リヴァイヴァル」  
津村真輝子「中国から出土するサーサーン式コインの特徴」  
山内 和也「アフガニスタン出土のサーサーン朝後期の彩文土器」  
佐々木花江・佐々木達夫「サーサーン朝後期ハレイラ島出土陶器の産地」  
谷一 尚「酒器としてのガラス容器」  
宮下佐江子「パルミラ F号墓内アーチのキーストーン彫像について」  
Ernie Haerinck「Archaeological research at ed-Dur, a large coastal site at Umm al-Qaiwain, U.A.E. of the 1st c. A.D.」  
Ernie Haerinck「Sculptures from Elymais during the Parthian period (Iran)」  
牧野 久実「イスラエル、エン・ゲヴ遺跡の発掘調査について」  
岡田 保良「メソポタミア初期キリスト教遺構の組積」  
三宅 理一「エルサレムのコプト・エチオピア教会問題」  
辻 成史「巡礼女エゲリアの闇 —その3—」  
深見奈緒子「インドのモスクに見る彫刻天井 —忌避され

た造形一]

日高健一郎「ハギア・ソフィア大聖堂の調査」

発表者公募を原則としているが、第1回研究会の斉東方氏(北京大学)、第3回研究会のSt. J. シンプソン氏(大英博物館)、第6回のD. T. ポッツ氏及びA. ベッツ氏(共にシドニー大学)らにつづいて本報告の両年度にも、上記の通り海外から研究者を招聘して発表者の列に加わっていた。日本人研究者と互いに情報を交換し、懇親を深める良き機会となっているとすれば幸いである。

第7回に参加したフランス学士院のP. ベルナル博士は、周知のとおり長くアフガニスタンの遺跡調査に自らを捧げ、アイ・ハナム遺跡の膨大な調査成果をつぎつぎに刊行している。遺跡へのアクセスがままならない今日、多数のスライドが用意されたこの講演は、遺構と出土品両面にわたる考古学上の要点、つまりはアジアにおけるヘレニズム文化の多彩な様相に対する最新の評価に接するまたとない機会であった。

同じ日の小谷の発表は、『史記』『漢書』中でのオクサス地方に関する言及を考察したもので、アイ・ハナム遺跡、あるいはその都市の興亡に対して東方から新たな視点を与えている。

第8回にベルギー、ヘント大学からお招きしたE. ヘーリンク博士は、かつてファンデン・ベルヘ博士とともに広くイラン考古学をリードし、近年では、1987年以降アラブ首長国連邦のエドゥール遺跡をフィールド調査の足場としている。今回のテーマの一つは、同遺跡最新の調査成果に対する最新の考古学的評価であり、紀元1世紀ごろに物資の集散する港湾都市だったことを実証する内容であるとともに、従来見過ごされがちだったオマーン半島地域のヘレニズム文化に光明を投じる報告であった。同様な視点は、パルティア期の南西イランに独自の国土と文化を保持した

エリュマイス王国の故地にも注がれ、イスラーム革命以前の観察に基づいて当地の磨崖彫刻を図像学的な観点から取り上げたのが、今ひとつの発表であった。

なお、第7回の春田の発表は、同地方のエリュマイス碑文を観察した最新情報であり、ヘーリンク講演と重ね合わせると未知の部分の多いヘレニズム国家の実像がよりよく理解されるにちがいない。

その他の発表について、内容まで立ち入って紹介する余裕がここではないが、2年度にわたる発表件数を、第6回までの総括同様に発表者の専攻分野別でみると、考古14、美術9、建築8、歴史3、総件数34題となる。ただ、第7回の辻の発表は、発掘中の島内3教会の年代観など考古学的考察であり、つづく長谷川の内容はメンフィスの歴史的背景への言及を主とする。第8回にはじめての参加でコプトとエチオピアの関係を扱った三宅は、建築より歴史そのものを見ているようであった。このように、各分野の人材のみならず、その発表内容までクロスオーバーする面白さは本会の特色といえそうである。

蛇足ながら、2000年に予稿集を作成しようとした動機は、2日間にわたる研究会の盛り上がりの割には成果物として参加者の手元に残されるものに不満なしとは言えなかったこと、また丁寧な資料やレジメを用意される積極的な参加者の意欲を冊子体として保存したいという意図があったことにある。ただ反面、事前に予稿を用意することが条件となれば発表を見合わせる方もいるのではないかという懸念と同時に、もしそうならば、プログラムの編成や一人当たりの発表時間にゆとりが生まれるのではないかという期待もあった。だがこの2年、その懸念と期待を裏切る結果が現われており、世話人としてこれを幸いとするか否か思案しているところである。

岡田保良

国士舘大学イラク古代文化研究所

Yasuyoshi OKADA

The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq,

Kokushikan University

佐々木達夫

金沢大学文学部

Tatsuo SASAKI

Kanazawa University